

歴史は未来の羅針盤

温故知新



これまでに刊行しました『近江日野の歴史』は、第一巻「自然・古代編」、第二巻「中世編」、第三巻「近世編」、第四巻「近現代編」、第五巻「文化財編」、第六巻「民俗編」、第七巻「日野商人編」、第八巻「史料編」となりました。教育委員会や各公民館などにおいて、一冊四、〇〇〇円で好評販売中ですので、ぜひともお買い求めください。

『近江日野の歴史』第三巻「近世編」を発売して以来、江戸時代の日野を様々な視点から紹介してきました。その最後となる今回は、幕末の日野について紹介します。

藩医の見た幕末

幕末の日野の様子を知ることのできる史料の一つに「永代日記」があります。これは仁正寺藩に仕えた医師森嶋柳元がつけた日記です。内容は世の中の出来事から森嶋が関心のあった博物学まで様々ですが、幕末の日野に生きた人々が見聞きし感じたことを現代に知らせてくれます。

黒船が来た

江戸時代の終わりごろになると、日本近海に「黒船」と呼ばれる西洋諸国の船が出没するようになりまし。特に嘉永六（一八五三）年のペリー来航は江戸時代の日本に大きな衝撃を与えた事件でした。

ペリーが来航すると仁正寺藩では万一の場合に備え兵を配備することを命じられました。また、商売への影響を心配して情報を集める日野商人もいました。

では、森嶋はペリー来航にどのような反応をしたのでしょうか。「永代日記」を見ると嘉永六年のペリー来航の記事がなく、森嶋は無関心なことがわかります。ペリーが日野から離れた浦賀（神奈川県横須賀市）に来たからでしょうか。しかし、翌年九月にロシアのプチャーチンが大坂湾に来航すると、森嶋はロシア船に関心を寄せています。ロシア船来航の情報は仁正寺藩の領地がある河内国星田村（大阪府交野市）から届けられ、仁正寺藩で対策が立てられたことも「永代日記」に記されています。

また、森嶋はロシア船来航に関わる京都の警備や大坂湾での「台場」と呼ばれる要塞の建設に注目しています。森嶋が西洋諸国の船

に備えるために大砲を造る必要を感じていたことや、京都の警備に関する幕府の命令などを書き写し、情勢をつかもうとしていたことも「永代日記」からうかがえます。

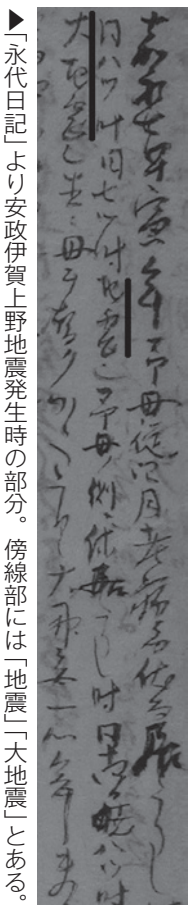
日野が揺れた地震

ペリーやプチャーチンが来航していたころ、日本各地で巨大地震が発生し、大きな被害をもたらしていました。森嶋は各地で起こる地震とその被害について、詳しく日記に書きとめています。その森嶋も地震に遭い被災することになりますが、その様子を「永代日記」から見てみましょう。

嘉永七（安政元）年六月十三日の正午頃に地震が発生、二度の余震の後、翌日午前二時頃に大きな地

震が起きました。地鳴りの音が洪水かと思えるほどの「大地震」だったと「永代日記」には記されています。森嶋は急いで病気の母親を背負いわずかな荷物を持って竹藪に避難しました。森嶋家では「表のかべ」や「葉たんす」が倒れ、「風呂場」が破損する程度の被害で済みました。この地震と毎日のように起こる余震によって日野では多くの家や寺が倒壊し、死者も出ています。また、地割れや落石が発生し、井戸水の温度があがる現象も起きています。「永代日記」によると、余震は翌々年におさまるまで日野で約二九〇回発生しています。

この一連の地震が三重県伊賀市を震源とした安政伊賀上野地震です。日野だけではなく近畿地方一帯に大きな被害をもたらしました。「永代日記」のほかにも日野には安政伊賀上野地震のことを記した史料が残されており、地震の凄まじさと被害の有り様を現在に伝えています。



▶「永代日記」より安政伊賀上野地震発生時の部分。傍線部には「地震」「大地震」とある。